

第1回総会検討公開委員会 議事録

日時：2020年4月24日(金)10時～12時30分

場所：浦和教会および Zoom

出席者：(計28名、うち Zoom 参加25名)

総会検討委員(5名)：安藤正(浦和)、川内裕子(帯広)、城倉啓(泉)、萩原永子(洋光台)、杉山望(金沢)

理事(4名)：吉田真司(相模中央)、中田義直(所沢)、金丸真(仙台長命ヶ丘)、鈴木牧人(姪浜)

監事(2名)：小河義伸(仙台)、松本素代美(多良見)

一般(17名)：秋山義也(瑞穂)、足立智幸(宮原)、石橋大輔(札幌)、エイカーズ愛(小樽)、奥村献(福岡)、坂元幸子(藤沢)、坂元俊郎(湘南台)、杉山いづみ(徳島)、高良研一(福岡ベタニヤ村)、竹田殉聖(福岡新生)、田坂元彦(横浜ニューライフ)、西本詩生(姪浜)、平尾輝明(茗荷谷)、平野健治(平塚)、間村史子(札幌)、村田悦(大分)、本山大輔(豊前)

配布資料：「総会に関するご意向お伺い」の「回答用紙」(加盟教会伝道所より、公表可のみ)

司会：川内裕子、書記：杉山望

《詳細内容》

- ▶ 委員長の城倉氏から、委員会の経緯と会議の趣旨説明を行った。
- ▶ 公開委員会の議事録は、発言者を伏して公表することを承諾いただいた。
- ▶ 始めに安藤氏がアンケートの回答の中から気になるポイントを取り上げて解説した。
- ▶ その後、参加者から自由に意見を述べていただいた。内容ごとに、意見を以下のように整理した。
A. 総会改革の範囲／B. バプテスト大会的な要素、教会のための総会／C. 機構改革との関わり／D. 連盟への加盟意識と義務／E. 総会出席への支援、新たな方法と課題／F. 公平性、人権／G. 選挙制度／H. 監査の役割／I. 協議の仕方

A. 総会改革の範囲

- ▶ アンケートの回答には、今の総会のシステムを整えていく意見と、総会開催の意義を根本から問い直す意見とに大半できる。意義を問い直すのであれば、技術論を問い直しても意味が無い。
- ▶ 今の総会を改善することは“バージョンアップ”、総会のあり方を根本から変えるのは“フルモデルチェンジ”と呼ぶことができる。アンケートを見る限りでは、まだ諸教会がどちらを良しとしているか判断できないので、今後見極めたい。
- ▶ 回答にはバージョンアップの意見もあるが、魅力的で大きく前進することを期待できる改善策はない。フルモデルチェンジに向けて議論を加速させていく必要がある。
- ▶ 大局的なことだけを取り入れる総会とした場合、色んな人が参加したときに、議論に耐えられるだろうか。例えば、全国の教会でユニバーサルサービスを提供するのか、全国津々浦々に教会があるべきなのか、という根本的なことが話し合われるようになる。根本的な議題に耐えられるなら、フルモデルチェンジはインパ

クトがある。

- 遠方から連盟の会議に出て行くことはハードルが高いが、連合総会にはほとんどの教会が集い、やり取りができています。そこで議論して決めるということが、本来バプテストが目指してきた姿だったのではないか。そこでの議論に耐えられないなら、全国組織として進めていく組織運営というのは、バプテストにはできないことなのかもしれない。
- テクニク的に改善していくことは、これまでも続けてきた。しかし、天城山荘で2泊3日の会議をすることや、各教会から代議員が集まって議論することが前提となっているために、超えられない一線があり、改革には至らなかった。

B. バプテスト大会的な要素、教会のための総会

- 総会が行ってよかった、また来よう、と思える総会になっていない。総会に行かなくても問題ないとも言われる。議事の時間を減らし、講演や分科会をして、良い学びが出来たと思えるようにする必要がある。
- 総会をビジネスミーティングにするのではなく、バプテスト大会の意味合いをもたせて、連合ごとの発表や音楽プログラム、アイスブレイクなど、お互いに励まし合う交わりをしたい。
- 連盟はコンベンションであり、事務所や組織ではなく、総会や大会で繋がることを良しとしてきた。そうであれば、総会と大会を楽しく、意義や夢があるものにしていくことが第一優先。それが次世代にもつながる。
- 海外の株主総会はビクトリーサービスで、「一年間がんばってよかったね、次も頑張ろうね」、ということがテーマ。それがないことが楽しさのない総会と感ずる原因ではないか。
- 教会と連盟の関係が、財政的に隔絶したところから議論の方向が変わっているのではないか。「教会のための総会」に向かえば、互いに励まし合うような総会になるかもしれない。連盟にはもう資金がないので、「教会のための総会」になっていくのではないか。
- アンケートから総会出席の動機の消極性を感じた。恵みを受けるためではなく、加盟の義務を果たすためというものが多い。議案を承認・採決することよりも、皆さんの関心のあるテーマに時間を割いていく必要がある。
- 総会に来られる方は年齢層が広いので、“楽しい”ということが同じじゃない。それをどのように一致できるか、同じテーマをどのように共有できるか、ということが解決できたときに、楽しい総会、熱を感じる総会となる。
- 決める事柄が大きくなると、総会に参加しても、協力伝道をしたという実感が得られない。決めるということでは、連盟と自分の教会という位置関係しか考えられず、集まった横の繋がりを感ずられない。決める総会とバプテスト大会を明確に分けて、決めるべきことは代議員が集まって決め、協力関係を確認することは別の事柄として行うことは可能か。
- 議論が相互的に行われ、やりとりを深めることができれば、協力伝道に関わっていく喜びや連帯を実感しながら、総会で決めるということができるようではないか。連盟加盟の議案にはそのような要素が多い。
- 私たちは集まるときに励まし合い、支え合い、共に集まることによってバプテストになっていったグループであるという歴史がある。連盟に先立って連合があったと言われるが、最初に連合が集まったときには、一つの教会では対処できない

こと、信仰の課題、励まし合い、教会の人事まで分かち合う親密な総会だった。今の状況では集えるところは集えるが、集えないところは集えない総会になってしまう。ここが大きな格差になる分岐点になるのか、原点に立ち戻って励まし合うために集まり、励まし合う結果、決めていくことに喜びを見いだしていくのか。喜びを見いだすことが教会のための総会であり、仲間を見いだしていく教会同士のための総会になっていく。

C. 機構改革との関わり

- 総会の大きな機能には決めるということがある。あれもこれも総会で決めるようになってきたために総会が肥大化してきた。何を・誰が・どこまで決めるのか、ということがあってはじめて、どうやって決めるのか、ということがある。事務所は総会で決めないと動けない。
- 総会で決まったことしか理事会は動けない。そこを大胆に変えていく。以前は2年に1度の総会で、隔年で各地区での大会をして盛り上がっていた。総会のある大会は2年に1度、あるいは数年に1度でもいい。残りの年は全国か、地方ごとに集まり、励まし合い、祈り合うことをメインにする。全世代で集まる大会の中で、2～3時間の総会を行う。そうすると新規加盟承認しかできないかもしれないが、それ以外の議論はオンラインで、年に一度に限らずに行う。委託した委員会などに細かいところはまかせ、理事会からも仕事を降ろしていく。そのときに連合をうまく使っていく。災害のことを考えると、他の地方に拠点を移して、そこから全国を引っ張ることがどこの地方でもできるように、普段から用意しておくようなパラダイムシフト、機構改革が急がれている。
- 災害時に、電気が通らず、オンラインが使えないということが多発することもあり得る。そういうときに総会で決められなくても連盟が動き、チェックもすることができたらいい。
- 理事会と評議員会という制度を作って理事を減らす。議案は極力絞って、それ以外は報告とし、議論伯仲しそうなことは協議する、ということが考えられる。理事会で決定すること、常任理事会で決定して理事会に報告すること、評議員会に報告することなど、仕分けの仕方を他教派も含めて研究し、連盟にふさわしい形を考えたらいい。
- 直接民主制か、代議員制か、ということも、議論を煮詰めていく中で選び取っていく。一部代議員制や評議員制など、どの形が連盟に合うかを考えていかなければならない。
- アンケートで、「今の連盟の総会がはるかに民主的で、個が重視されている」、と言う意見もあった。これは直接民主制をよく表している。代議員制や評議員制は、大きな組織が動くにはいい制度だが、今よりも参加者が減るだろう。変化がどういう影響を及ぼすのか、ということシミュレーションすることが必要。
- 連盟改革のスケジュールの中で総会の改革が具体的な提案として先に出されてくる。それは連盟の改革課題とものすごくリンクしてくる。例えば理事定数の減は連盟の機構・政策と関連してくる。総会改革は連盟改革に大きなファクターとして先に進んでいく。

D. 連盟への加盟意識と義務

- 教会の課題や使命と、連盟総会の議題や課題に乖離がある。その距離の遠さ・近さ

が総会に対する出席の熱意にもつながっている。

- 連盟は加盟するもので、主体は教会という意識が前提となって総会は成り立つ。連盟に加盟しているという意識の確認を、総会改革の中でしていくこと、教会が主体なのだということを確認していくことが、連盟という協力伝道体の体力となる。
- 連盟に加盟しているのは協力伝道を果たすため、そのために果たすべき事柄があるということは大事な事。義務をネガティブに捉えるのではなく、それこそ喜びであると捉えられる加盟がなされているのではないか。
- 加盟意識を高めることもずっと語られてきた。そのことも、連盟と連合レベルでは意識が違う。連盟は遠くにあるものと感じている人が、連合では主体的に関わっている。事柄が動いていく中でもう一度、意識が変革されるということもあるのではないか。

E. 総会出席への支援、新たな方法と課題

- 初めての人が、参加して良かった、と言える総会を目指してほしい。例えば食事の席のことなど、初めての人への配慮をしてほしい。
- 各地方連合にサテライト会場を作ったり、WEBの会議を取り入れたりする。
- 仕事を持っている人も参加しやすいように、日程を8月にする。
- 開催日程を水～金曜日ではなく、木～土曜日にする。
- 自分の連合では経済的、時間的、距離的、体力的な問題で参加できない教会が多かった。今年から集まれるという前提がなくなる。今までのことがありきでは意味をなさない。集まれるときには、地方の教会、小さな教会の声が聞こえる総会となることを願っている。連合ごとに集まることが現実的。
- WEBでの総会と、議決権を書類で行使する方法との組み合わせも考えている。
- お連れ合いが働いていて、子どもがいるので参加できない、という意見があった。教会の財政事情の悪化や、共働き・兼職が増えていくことを考えると、今まで通り一年に一回、どこかに全員が集まって議論する、という前提条件を考え直さないといけない。
- 総会に行ってもらったとしても、そこで話される事柄やボキャブラリーは専門的なことが多く、これまでの連盟の流れや全体的なことなど、前知識がないと取り残され、疎外感を覚えてしまう。連盟に加盟しているメンバーのほとんどは信徒であり、毎年総会に行くような人ではない。その部分ももう少し考える必要がある。
- 教会の総会が郵送と書類のみによる採決・投票となった。書類のやり取りだけでは計画案の意図や意識の共有が欠けてしまい、聞くことや見ることを通して認識が深まることがわかった。集まって行うことの意味を考え直す必要がある。
- 集まらない可能性が出てくる中で、「いかに集まらないで集まるか」という知恵を絞れないか。集まるだけでなく広がる視点も考えないといけない。礼拝に集まらない中で、全く違う広がりが生まれている。集まらない中で集まっている感覚を経験している。

F. 公平性、人権

- 天城に近い教会、お金のある教会が多く票をもってしまふ。選挙は時間をかけて丁寧候補者を選べばいい。天城に行けていない教会も選挙に参加することが

できるように。

- 代議員は1教会2名までとする。
- 集まる人、選ばれる人の偏りは大きな課題。
- 色んな事をしていく中で、環境によってできる・できないの違いがあるので、そのことで教会間の格差が生まれて行かないようにする必要がある。
- 集まるよりも決めるプロセスに、いかにみんなが関わることができるか、ということが重要。そのプロセスに関わるためには総会に参加しなければいけないのであれば、総会に行けない人は関われない。総会に行きたくても行けない人の大きな理由は予算がないとか、無牧師の状況の中で信徒を派遣することが日程的に難しいということがある。そのような教会こそプロセスに関わって、協力伝道の輪の中で支えていかなければいけない。
- 総会において参加する人の人権を守る意識をどのように共有し、前提とできるか。他者の人権を脅かす発言が総会の中で多発している。集まっている人・人権が守られることを前提に改革を考えてほしい。

G. 選挙制度

- 現行の選挙制度では候補者がいつも同じような顔ぶれになる。そのことは総会での協議内容や、理事・委員の人選にも影響しており、出席教会の偏りにも影響がある。
- 教会組織をしたときに参政権を得て、自分たちの責任をもって関わることができることを喜び、予備投票を行っている。しかし予備選挙の投票率は非常に低い。諸教会は権利を当たり前のように思っているのか。
- 予備選挙のために教会総会の承認を得ることができない。手続きが簡素化されれば、投票率ももう少し上げられる。
- 事前に教会総会で予備投票を執事会に一任することを決めて、執事会内で推薦している。推薦者は後から月報で報告している。
- 選挙を議場以外の場（郵送など）で行えば総会の時間を短くしたり、議事の時間を長くしたりすることができる。
- 選挙は個人ではなく、教会を選べばいい。

H. 監査の役割

- 監査が年々厳しくなり、報告資料も長い印象がある。企業のような監査が適切なのか。
- 監査について考えるのは、理事会ではなく総会だろう。
- 監事制度が強くなったのも、連盟が資金を持ったときに、そこから生じた課題に応じたものだった。その時から規則に沿った運用を行い、活発な議論よりも筋道立てた議論をする方向になった。

I. 協議の仕方

- 議論の仕方、特に動議についてわかりづらく、初めての方にはわからない。もう少し自由闊達に議論できる議場を作ってほしい。そのためにも議案数を絞ることも必要。
- かつては動議が多く出され、声明文などは原案が変更されることもあった。しかし動議では予算の修正ができないので、理事会提案の議案への賛否を問う形にな

り、質問は提案に対する理解を深めるためのものとなっている。

- あるときから総会のしおりの中に議事の進め方が織り込まれ、徹底されるようになった。
- 質疑応答は十分になされず、討論は賛成・反対がかみ合わない。先に賛成意見を取り、その後、反対意見を取るのはいかがでしょうか。
- 議事の采配は、その都度の議長団の采配に左右される。議運の引き継ぎがなされるようになり、議事の進め方は合理化されたが、同時に議論を深めることが制限された。質問と意見を分けて取り扱うのではなく、双方を含めた仕方がいい。
- 伝道に対する思いや熱意、工夫などを励まし合うような議論が出てくる総会がいい。質問をまとめて回答すると、議論の中で本質が練られるということがない。
- 議長団は全ての議案を終わらせることを考える。限られた時間と多くの議案と議場の混乱があると、取りまとめることにはかなりの工夫と協力がある。代議員間の議案の読み込みの温度差などもある。
- 総会で扱う内容は、文書報告、単なる報告、議案、協議に分けられる。議場では文書報告には触れず、報告は簡単に触れる。議題はおおよそ承認されると見込めるもの。協議は議論が伯仲すると予想されるもので、出された意見を受けながら、次回総会に議案として提出する。協議で意見が分かれば協議に切り替えてもいい。そのように強弱をつけてはどうか。
- 限られた時間の中でどこに重きを置くか。総会は現状、議論する場であり、決する場であり、交わりをする場でもある。総会でしかできないことは、決することと交わりをすること。議論は他の場で行えば、活発な意見が出るのではないか。
- 総会が始まる前に、関係者に質問の意味を伝え、その答えを聞いて、質問が個人的な興味を満たすものなのか、全体が聞いた方がいいのかを見極めてから質問すれば、ストレスがたまらない。事前質問は資料に書かれているだけで反映されないことが多いように感じる。
- 連合ごとに代議員が集まって議論をする場が事前にもたれ、その議論を反映した意見を総会に持ち寄るということもできる。
- 総会の中での工夫は行っているが、議論の場が総会の中で足りない。事前質問はできるが、議論にはなっていない。他の場で議論ができれば、そこで色々な意見を聞き、自分の意見をまとめて提出する、という段階を踏むことができる。それをインターネット会議で行うこともありうる。
- 総会書記は1名だと大変。少なくとも複数名必要。補助書記はいなくても、総会後に議事録をまとめる人が複数いればいい。あるいは全部文書化しなくても、総会が短い時間で終わるようになれば、細かいところは録画した映像を見てもらえばいい。
- 他派や他国の総会の有り方を委員会で研究・検討してはどうか。例えば、福音ルーテルでは用紙ではなく、押しボタンで投票している。